アイロニーによる非難の対象は反復的 言及によって同定されるか

石田 容士 阿部 純一 北海道大学

Is the victim of irony identified by echoic mention?

Yasushi Ishida and Jun-ichi Abe (*Hokkaido University*)

Sperber and Wilson (1981) proposed that the speaker who uttered the expectation that is contradicted by irony is identified as the victim of the irony by the echoic mention of his/her utterance. We conducted two experiments to explore whether the victim of irony is identified by echoic mention. Experiment 1 examined the validity of this hypothesis using three conditions. In the Hearer (H) echo condition, the speaker who is echoed is the hearer of the potential irony. In the No-Hearer (NH) echo condition, the speaker who is echoed is not the hearer of the potential irony. The third condition is the no-echo condition. The result supported the hypothesis. In Experiment 2, we manipulated the H echo factor and the NH echo factor in 4 conditions. The results replicated Experiment 1, and showed that the NH is identified as the victim of irony more than the H. These results suggest that echoic mention and also status in the discourse are factors in the comprehension of irony.

Key words: irony, echoic mention, victim of irony.

The Japanese Journal of Psychology
2010, Vol. 80, No. 6, pp. 485-493

友人から“あの映画、絶対面白いよ”と誘われて観に行ったが、全くの期待外れでがっかりしたとしよう。このとき、友人に対する“面白い映画だったね”という発話は、通常、“アイロニー”として理解され、多くの場合、映画に対する期待が裏切られたことに対する失意や、結果的に損なわれる期待を抱かせた友人に対する非難の表現として解釈される。この非難の表現が投げかけられた対象は、“アイロニー標的 (victim of irony)”と呼ばれる (Sperber & Wilson, 1981; 内海, 1997)。既に述べたように、上記の例におけるアイロニー標的は、一般的には、結果としては損なわれることになる期待を抱かせた友人と捉えることができる。しかし、映画それ自体 (あるいは映画制作者) と捉えられる場合もあるかもしれない。このように、アイロニー標的は容易に同定できるというわけではない。本研究では、この“アイロニー標的がどのようにして同定されるのか”について、実験的に検討することを目的とする。なお、本研究では、元来のアイロニー、すなわち“反語”的に理解される発話という定義

の範囲内のアイロニーを対象とし、より広い意味でのアイロニー、すなわち結果として聞き手に“嫌み”や“皮肉”などの効果を与える発話全般を対象とはしない。

アイロニー標的がどのようにして同定されるかという問題を直接的に扱った実験的研究はほとんどない。ごくわずかに、その同定に影響を及ぼす要因について、2, 3 の実験的研究が報告されているのみである。例えば、Kreuz & Glucksberg (1989) は“アイロニー標的”となる人物が専門家であるか素人であるかによって、ある発話がアイロニーとして理解される程度が異なるかを検討しており、その結果から、“アイロニー標的”となる人物が専門家であるか素人であるかはアイロニーとして理解される程度に影響しないことを報告している。また、Katz & Pexman (1997) は、“アイロニー標的”となる人物の職業の違いは発話がアイロニーとして理解される程度に影響することを報告している。

アイロニー標的がどのようにして同定されるか、という問題を直接取り上げた仮説としては、Sperber & Wilson (1981, 1986; Jorgensen, Miller, & Sperber, 1984) による指摘が挙げられる。Sperber らは、“協調性の原理 (co-operative principle)”に基づくアイロニー理解

の仮説 (Grice, 1975) を批判し、期待が損なわれた状況で、損なわれた期待を“反復的に言及 (echoic mention)”することにより、話者が間接的に否定的態度を示す表現がアイロニーである、とした。そして、誤った期待を抱かせた発話の話者、つまり、反復的に言及された発話の話者が“アイロニー標的”として同定される、と主張した。

反復的言及という特徴によってアイロニーを説明しようとする Sperber らの考えについては、いくつか批判もある。例えば、反復的言及以外にも Searle (1969) の言う適切性条件の違反により生じる“語用論的不誠実性 (pragmatic insincerity)”は達成できるという批判 (Kumon-Nakamura, Glucksberg, & Brown, 1995) や、反復的言及という特徴だけではアイロニーの多様性を説明するには不十分であるという批判 (内海, 1997; Utsumi, 2000), あるいは、反復的に言及される元の発話が明らかなアイロニーは限られているという批判 (Okamoto, 2006; 岡本, 2007) などである。しかしながら、これらの批判は結局のところ、広い意味でのアイロニーを対象とした場合 (すなわち、反語としてとらえられる範囲よりも広く、間接的な非難全般を対象にした場合) には、反復的言及という特徴のみでは説明しきれない、という批判であり、発話が反語的に理解される際の反復的言及の役割が反語的に理解される際の反復的言及の役割について、特に否定的な意見を提出しているわけではない。

本研究の目的の一つは、Sperber らが提出したこの、反復的に言及される元の発話の話者がアイロニー標的として同定される、という予測が、心理的に妥当であるかを実験的に検討することである。実験においては、この予測の検討を、二つの要因 (“矛盾”および“反復”) を設定することで行う。まず、対象となる発話は“結果として誤った予期が反復的に言及された”発話でなければならないことから、その発話の内容が結果として誤った内容となるかどうかを、“矛盾”の有無の要因として設定する。また、言及が反復的になされるかどうかを、“反復”の有無の要因として設定する。このような要因設定によって、発話の内容が先行文脈とは矛盾した状況において、反復的に言及された発話の話者だけがアイロニーによる非難の対象として同定されるのか、あるいは、語用論的不誠実性を達成するであろう“矛盾”という条件が満たされるのみでも、何者かがアイロニーによる非難の対象として同定され得るのか、の検討を行う。

実験においてはさらに、この設定と連動させて、反復的に言及される元の発話の話者がどのように会話に参加しているか、つまり、対象となる発話を当事者として聞いている状況にあるかないか (当事者か第三者か) によって、“アイロニー標的”の同定が影響を受けるかどうかを検討できるように条件を設定する。そ

の理由は、次のような目的意識からくるものである。

そもそも、アイロニーとは、非難を直接的に表現する発話をいうものではなく、まさに間接的に表現した発話をいうものである。話者が敢えて間接的な表現であるアイロニーを用いる動機は、同じ場において非難の対象となる相手の面子を保つ機能 (face-saving 機能) をアイロニーが担うからである、という指摘がある (Brown & Levinson, 1987; Dews, Kaplan, & Winner, 1995; Dews & Winner, 1999)。この指摘からすると、話者がアイロニーを用いるのは、その発話がなされる会話の参加者の面子を保つため、ということになる。もしもこの考えが妥当であるならば、アイロニー標的が会話に参加している発話の受け手、つまり、“直接の聞き手 (Hearer)”である場合とそうでない場合、つまり、“第三者 (Non-Hearer)”である場合とでは、発話が同様に反復的に言及されていたとしても、アイロニー標的として同定される程度は異なってくることになるはずである。

以上のとおり、本研究は、“アイロニー標的がどのようにして同定されるのか”という問題に対し、“反復的に言及される発話の元の話者がアイロニー標的として同定される”という予測の妥当性の実験的検討と“会話に参加する立場”がその同定に影響を与えるかについての実験的検討によって、アプローチしようとするものである。

実験 1

実験 1 では、文脈とは矛盾した状況で、反復的に言及される発話の話者が、アイロニーとして理解される可能性のある発話の聞き手 (以下、“H”とする) である場合 (H 反復条件)、聞き手とはならない者 (以下、“NH”とする) である場合 (NH 反復条件)、反復的に言及される発話がない場合 (反復なし条件) の 3 条件を設ける。反復的に言及される発話の話者が“アイロニー標的”として同定される、と言えるならば、H へ向けられたアイロニーは、H の発話を反復的に言及する条件 (H 反復条件) の方が他の 2 条件よりも、その皮肉の程度は、高く評定されることになるであろう。一方、NH へ向けられたアイロニーは、NH の発話を反復的に言及する条件 (NH 反復条件) の方が、他の 2 条件よりも、その皮肉の程度は、高く評定されることになるであろう。

方法

実験計画 実験は 2 要因 6 水準 (“矛盾” 2 水準 × “反復” 3 水準) の参加者内実験計画で行われた。

実験参加者 専門学校生 96 名 (男子 41 名, 女子 55 名。平均年齢 19.28 歳) が実験に参加した。

材料 2 人または 3 人の人物が登場し、5 文程度からなる短い物語を 6 組用意した。各物語はある発話で

Table 1
実験1で用いられた言語材料テキストの例

-
- (1) 良夫と和子はドライブに行く予定を立てていた。
 (2) (H反復条件の場合)
 ドライブの前日、和子は“きつと明日はいい天気になるわよ”と言っていた。
 (NH反復条件の場合)
 ドライブの前日、テレビで気象予報士が“明日はいい天気になるでしょう”と言っていた。
 (反復なし条件の場合)
 一文なし—
 (3) (無矛盾条件の場合)
 ドライブの当日は快晴だった。
 (矛盾条件の場合)
 ドライブの当日はどしゃぶりだった。
 (4) 良夫は和子に言った。“ほんと、いい天気だね”
-

注) (4)の発話がターゲット発話となる。

終わっており、その発話がターゲット発話となる。先行文脈の操作により“矛盾”要因（ターゲット発話が先行文脈における事実と矛盾する条件と矛盾しない条件の2水準）および“反復”要因（ターゲット発話が先行文脈におけるHの発話を反復する条件とNHの発話を反復する条件、およびいずれの発話も反復しない条件の3水準）が操作され、各物語に6条件（“矛盾”2水準×“反復”3水準）が設けられた。Hの発話を反復的に言及することとなる矛盾・H反復条件のターゲット発話は、Hに対するアイロニーとして理解され、一方、NHの発話を反復的に言及することとなる矛盾・NH反復条件のターゲット発話は、NHに対するアイロニーとして理解されることとなることが予想される。Table 1に“ドライブ”と題された材料例を示す。なお、全ての材料については石田・阿部(2007)を参照されたい。

手続き 実験参加者には六つの物語がそれぞれ異なる条件で提示され、全部で6材料テキスト（各1物語×6条件）が冊子により提示された。実験参加者は各材料テキストを読んだ後に、ターゲット発話に関する評価が求められた。この評価は、(a)“言葉どおりである”，(b)“和子（反復される発話の話者であり、かつ、ターゲット発話の聞き手。以下、“H”）に対する皮肉である”（以下、“Hへの皮肉”），(c)“和子以外の者（以下、“NH”）に対する皮肉である”（以下、“NHへの皮肉”）という三つの尺度について、“そう思わない—1”から“そう思う—7”までの7件法による評定を求めることにより行われた。“皮肉”という語を評定尺度で用いたのは、“アイロニー”という語が実験参加者になじみがなかったことが予備実験で確かめられたからである。

なお、一度用いられた物語は同一実験参加者の他の条件では用いられなかった。実験参加者にどの材料テキストがあてがわれるかはランダムであり、また、全ての材料の出現頻度は同じであった。質問には直感的に回答するよう教示が与えられた。課題遂行は約15分かかった。

結果と考察

まず、無矛盾の条件下で発話がアイロニー（本実験では“皮肉”）として理解されるかどうかについて吟味する。

“文字どおりの意味である”尺度の結果について、反復×矛盾の2要因分散分析を行った結果、矛盾の主効果が有意であり（ $F(1, 95) = 1163.95$; $F(2, 1, 5) = 498.37$, ともに $p < .01$ ），反復の主効果と交互作用は有意ではなかった。無矛盾条件の評定平均値が(6.42)であるのに対し、矛盾条件の評定平均値は(1.57)であり、無矛盾条件では非字義性（non-literality）が認知されなかったことが確認された。すなわち、単なる嫌みや非難と異なり、アイロニーは非字義性を本質的特徴とすることから、無矛盾条件におけるターゲット発話はアイロニーとして理解されなかった、ということである。

同様に、無矛盾条件における“Hへの皮肉”尺度および“NHへの皮肉”尺度の評定平均値は1.5未満であり、H, NHとも“アイロニー標的”として同定されていないことが確認された。以上のとおり、三つの尺度において、無矛盾条件における発話はアイロニーとしては理解されず、“アイロニー標的”の同定もされなかったことから、以下においては、矛盾条件の結果についてのみを考察の対象とする。また、以後は、“Hへの皮肉”尺度と“NHへの皮肉”尺度の結果について述べる。

まず、反復条件ごとに、“Hへの皮肉”および“NHへの皮肉”の平均評定値を求めた（Table 2）。その結果、“Hへの皮肉”では“反復”要因の主効果が認められ（ $F(1, 190) = 53.09$; $F(2, 10) = 16.01$, ともに $p < .01$ ），Tukey法による各反復条件間の比較では、H反復条件と他の2条件との間にそれぞれ有意な差が見られた（いずれも $p < .01$ ）。この結果は、Hの発話を矛盾した状況で反復的に言及することにより、NHではなくHが“アイロニー標的”と同定されたことを示す。この結果から、“反復的に言及される発話の話者が‘アイロニー標的’として同定される”という予測の心理学的妥当性は支持されたと言える。

“NHへの皮肉”では“反復”要因の主効果が認められ（ $F(1, 190) = 10.26$, $p < .01$; $F(2, 10) = 5.78$, $p < .05$ ），Tukey法による各反復条件間の比較では、H反復条件とNH反復条件との間に有意な差が見られた（ $p < .01$ ）。“Hへの皮肉”の場合とは異なり、NH反復

Table 2
各条件におけるNH・Hへの皮肉の平均評定値

	反復条件		
	NH反復条件	H反復条件	反復なし条件
矛盾条件			
Hへの皮肉	2.10 (1.86)	4.36 (2.45)	2.11 (1.79)
NHへの皮肉	5.46 (2.14)	4.16 (2.32)	4.83 (2.38)
無矛盾条件			
Hへの皮肉	1.22 (0.76)	1.49 (1.24)	1.23 (0.91)
NHへの皮肉	1.43 (1.11)	1.21 (0.65)	1.36 (1.03)

注) ()は標準偏差を示す。

条件と反復なし条件との間に有意差は見られなかったものの、矛盾した状況でNHの発話を反復的に言及することにより(矛盾・NH反復条件)、HではなくNHが“アイロニー標的”と同定されたことをこの結果は示す。この結果から、“Hへの皮肉”における結果と同様に、“反復的に言及される発話の話者が‘アイロニー標的’として同定される”という予測の心理学的妥当性は支持されたと言えそうである。

ただし、以上の結果について、予測とは異なる点が見られた。予測は、H反復条件では、“Hへの皮肉”が他の2条件よりも高く評定され、一方、NH反復条件では、“NHへの皮肉”が他の2条件よりも高く評定されるというものであった。そして、反復的に言及される者がいないのであるから、反復なし条件では、“Hへの皮肉”も“NHへの皮肉”も共に評定値が低くなることも、予測に含意されていた。しかし、本実験の結果では、予測と異なる三点があった。一点目は、NH反復条件では予測どおり“NHへの皮肉”の平均評定値(5.46)が“Hへの皮肉”の平均評定値(2.10)よりも高かったものの、H反復条件では“Hへの皮肉”の平均評定値(4.36)が“NHへの皮肉”の平均評定値(4.16)よりもあまり高くなっていなかったことである。二点目は、“NHへの皮肉”については、NH反復条件が他の2条件よりも高く評定されると予測されていたにもかかわらず、反復なし条件における平均評定値(4.83)とNH反復条件における平均評定値(4.16)との間に有意な差が示されなかったことである。三点目は、HもNHもともに反復的に言及されていないのであるから、両者とも“アイロニー標的”と同定されない、と予測された反復なし条件で、“Hへの皮肉”の平均評定値(2.11)よりも“NHへの皮肉”の平均評定値(4.83)の方が高くなっていたことである($t(1, 95) = 82.07$, $t(1, 5) = 38.79$; いずれも $p < .01$)。

以上の三点について一つの解釈を求めるならば、次

のようになる。すなわち、ターゲット発話の聞き手となるHに対するよりも、聞き手とはならないNHの方が、より“アイロニー標的”として同定されやすい、という解釈である。

それでは、なぜ、このように解釈できる結果が生じたのであろうか。このことについては、二つの可能性が考えられる。その一つは、本実験で用いられた言語材料で用いられた“ね”という助詞による影響のため、H反復条件における“Hへの皮肉”評定と“NHへの皮肉”評定に差が生じなかったという可能性である。“ね”という助詞は、話者と聞き手が情報を共有している状況に用いられ(岡本, 1993)、直接的な聞き手に同意を求めたり、共感を示したりする機能を持つと考えられる。したがって、NHが“アイロニー標的”として同定されるであろう場合(NH反復条件)と異なり、直接的な聞き手であるHが“アイロニー標的”として同定されるであろう場合(H反復条件)には、“ね”という助詞が伴うことで、このHに対する非難の意味合いが薄れてしまった可能性がある。

もう一つの可能性として、本来、HよりもNHの方が“アイロニー標的”として見なされやすいということが考えられる。このため、反復なし条件においては、“Hへの皮肉”よりも“NHへの皮肉”の方が高く評定され、H反復条件においては、“Hへの皮肉”と“NHへの皮肉”とでは、評定に大きな差が生じなかったのかも知れない。もし、そうであるならば、“ね”という助詞を用いずに同じ実験を行っても、実験1と同じ結果になることが予測される。

以上の二つの可能性に基づき、実験2では、“ね”という助詞を取り除いた上で、“HよりもNHの方が、‘アイロニー標的’として同定されやすい”と言えるかどうかについて検討する。

実験 2

実験2では、“ね”という助詞による影響を排除し、

改めて“反復的に言及される話者が‘アイロニー標的’として同定される”と言えるかどうか検討する。そしてまた、“H よりも NH の方が、‘アイロニー標的’として同定されやすい”という予測についても調べるため、“H 反復”および“NH 反復”をそれぞれ要因として設定し、“H 反復”2水準（あり・なし）および“NH 反復”2水準（あり・なし）の2要因4水準の実験計画で行うことにする。この条件操作により、実験1では設定されなかった、H および NH の両者とも反復的に言及される条件（H 反復あり・NH 反復あり条件）が設定されることとなる。そして、もし、H 反復なし・NH 反復なし条件（実験1の反復なし条件に相当）のみならず、H 反復あり・NH 反復あり条件においても、“H への皮肉”よりも“NH への皮肉”の方が高く評定されるのであれば、“H よりも NH の方が、‘アイロニー標的’として同定されやすい”と言えることとなる。

実験2における他の条件と実験1で設定された条件との関係は次のとおりである。H 反復あり・NH 反復なし条件（実験2）は、H 反復条件（実験1）に相当し、H 反復なし・NH 反復あり条件（実験2）は、NH 反復条件（実験1）に相当し、また、H 反復なし・NH 反復なし条件（実験2）は、反復なし条件（実験1）に相当する。そして、実験1では設定されなかった H および NH が反復的に言及される条件（H 反復あり・NH 反復あり条件）が、実験2では、新たに設定される。

ところで、“H よりも NH の方が‘アイロニー標的’として同定されやすい”という予測は、直感的には誤っていないように感じられる。多くの非難は、悪口や陰口などのように、非難の対象である相手に直接向けられることは少なく、相手が目の前にいない時（本実験における NH）に行われることが多いからである。

また、非難する際にアイロニーが用いられるのは、アイロニーには、相手の面目を保つという機能があるという考えからも、“H よりも NH の方が‘アイロニー標的’として同定されやすい”と予測される。アイロニーが有するこの機能については次のとおり考えられている。まず、非難の対象となる相手に向けて、直接的な非難の言葉を発することは、非難された相手（本実験における H）の面子を脅かすこととなる。しかし、非難にアイロニーを用いれば、面子を脅かすことが避けられる。このことから、アイロニーは、非難された相手の面子を保つ機能、すなわち“face-saving 機能”を有すると考えられる（Brown & Levinson, 1987; Dews et al., 1995; Dews Winner, 1999）。

実験2では、この“H よりも NH の方が‘アイロニー標的’として同定されやすい”という予測についても実験的に確認することにより、会話への参加のしかたによってある発話がアイロニーとして理解されるこ

とにどのように影響を及ぼすかを調べる。もし、H 反復あり・NH 反復あり条件および H 反復なし・NH 反復なし条件において、“H への皮肉”よりも“NH への皮肉”が高く評定されるならば、この予測が心理学的に妥当であると言えることとなる。そしてまた、H 反復あり・NH 反復なし条件においては“NH への皮肉”よりも“H への皮肉”の方が高く評定され、かつ、H 反復なし・NH 反復あり条件においては“H への皮肉”よりも“NH への皮肉”の方が高く評定されるのであれば、“反復的に言及される話者が‘アイロニー標的’として同定される”と言えることとなる。

方 法

実験計画 実験は3要因8水準（“矛盾”2水準×“H 反復”2水準×“NH 反復”2水準）の参加者内実験計画で行われた。

実験参加者 専門学校生32名（男子21名、女子11名。平均年齢18.34歳）が実験に参加した。

材料 数名の人物が登場する短い物語を8組用意する。各物語は、評価の対象となるターゲット発話を含む。先行文脈の操作により“H 反復”（ターゲット発話の聞き手が元の話者として反復言及される。あり・なしの2水準）および“NH 反復”（ターゲット発話の聞き手以外の者が元の話者として反復言及される。あり・なしの2水準）、さらにまた“矛盾”（ターゲット発話が実際の状況と矛盾する。矛盾・無矛盾の2水準）の3要因が操作され、各物語に8条件（“H 反復”2水準×“NH 反復”2水準×“矛盾”2水準）が設けられた。実験参加者にはいずれかの条件の物語が提示され、全部で8材料テキスト（8条件×1物語）を呈示することになる。なお、同一実験参加者に対してある条件で一度用いられた物語は、他の条件で再び提示されない。Table 3に“映画”と題された矛盾条件の材料例を示す。なお、全ての材料については石田・阿部（2007）を参照されたい。

手続き 実験1と同じであった。ただし、実験1とは評定尺度が異なり、“文字どおりの意味である”、“H への皮肉”、“NH への皮肉”の三つの尺度に加えて、H と NH 以外へのアイロニーとして理解されていないかどうかを確認するため、“由香に対する皮肉である”（以下、“H, NH 以外の登場人物への皮肉”）、“陽子・映画評論家・由香以外に対する皮肉である”（以下、“登場人物以外への皮肉”）という二つの尺度が加えられた。課題遂行は約25分であった。

結果と考察

実験1同様、まず、“文字どおりの意味である”尺度について吟味する。“文字どおりの意味である”尺度について、H 反復×NH 反復×矛盾の3要因分散分析を行った結果、矛盾の主効果が有意であり（*F*1

Table 3
実験2で用いられた矛盾条件の言語材料テキストの例

-
- (1) 一平と陽子と由香は映画を観に行く相談をしていた。
 (2) 情報誌を見ていると、ある著名な映画評論家が
 (H反復あり・NH反復あり条件、および、H反復なし・NH反復あり条件の場合)
 “今年度、最高の傑作です”と賞賛している映画があった。
 (H反復あり・NH反復なし条件、および、H反復なし・NH反復なし条件の場合)
 “映画館を後に、レストランで感想を話し合うのも映画の楽しみです”と述べていた。
 (3) (H反復あり・NH反復あり条件、および、H反復あり・NH反復なし条件の場合)
 陽子は(も)“この映画面白そう。きっと最高の傑作よ”とその(ある)映画に注目した。
 (H反復なし・NH反復あり条件、および、H反復なし・NH反復なし条件の場合)
 陽子は(も)“映画のあと、レストランでご飯食べよう”と言った。
 (4) 3人はその(ある)映画を観に行くことにした。
 (5) (矛盾条件の場合)
 しかし、映画は全く退屈で、3人とも寝てしまった。
 (無矛盾条件の場合)
 すると、映画はとても面白く、3人とも興奮してしまった。
 (6) 映画館を出て一平は陽子に“最高の傑作だ”と言った。
 (7) 由香はそれを聞いていた。
-

注) (6)の発話がターゲット発話となる。(3)では、H反復あり・NH反復なし条件およびH反復なし・NH反復あり条件の場合、“陽子は”となり、H反復あり・NH反復あり条件およびH反復なし・NH反復なし条件の場合、“陽子も”となる。また、H反復あり・NH反復あり条件の場合、“その映画”となり、H反復あり・NH反復なし条件の場合、“ある映画”となる。(4)では、H反復なし・NH反復なし条件の場合のみ、“ある映画”となり、その他の条件では“その映画”となる。

(1, 31) = 609.40, $p < .01$; F_2 (1, 7) = 1004.59, $p < .01$), その他の主効果や交互作用は有意ではなかった。無矛盾条件の評定平均値が 6.31 であるのに対し、矛盾条件の評定平均値は 1.61 であり、無矛盾条件におけるターゲット発話はアイロニーとして理解されなかったことが確認された。

また、無矛盾条件における“H への皮肉”尺度および“NH への皮肉”尺度の評定平均値は 3 未満であり、H, NH とも“アイロニー標的”として同定されていないことが確認された。

以上のとおり、三つの尺度において、無矛盾条件における発話はアイロニーとしては理解されず、“アイロニー標的”の同定もされなかったことから、以下においては、矛盾条件の結果についてのみを考察の対象とする。

まず、H と NH 以外へのアイロニーとして理解されていないかどうかを確認するために用意された“H, NH 以外の者への皮肉”と“登場人物以外への皮肉”について、それぞれ平均評定値を求めたところ、“H, NH 以外の者 (例えば陽子) への皮肉”の平均評定値は、いずれの反復条件においても 2 以下であり、H, NH 以外の登場人物が“アイロニー標的”として同定されていないことが確認された。また、“登場人物以外の者への皮肉”も、H 反復なし・NH 反復なし条件では 4.47 という平均評定値を示したが、他の 3 条件

での値は 3 前後であり、H または NH 以外の者が“アイロニー標的”として同定されていないことが確認された。

次に、反復条件ごとに“H への皮肉”および“NH への皮肉”の平均評定値を求めた (Table 4)。“H への皮肉”について 2 要因分散分析 (“H 反復” 2 水準 × “NH 反復” 2 水準) を行ったところ、“H 反復”の主効果が認められ、H 反復なし条件よりも H 反復あり条件の方が“H への皮肉”の平均評定値が有意に高いことが確認された (F_1 (1, 31) = 55.31, F_2 (1, 7) = 52.70; いずれも $p < .01$)。“NH への皮肉”についても、同様に 2 要因分散分析を行ったところ、“NH 反復”の主効果が認められ、NH 反復なし条件よりも NH 反復あり条件の方が“NH への皮肉”の平均評定値が有意に高いことが確認された (F_1 (1, 31) = 65.64, F_2 (1, 7) = 327.86; いずれも $p < .01$)。このことから、実験 1 同様、“反復的に言及される発話の話者が‘アイロニー標的’として同定される”という予測は支持されたと考えよう。

ところで、本実験 2 では、実験 1 と異なり、“ね”という助詞の影響を排除するべく、“ね”が付加されていない材料テキストが用いられた。実験 1 では、“ね”という同意を求める助詞の影響により、H 反復条件における“H への皮肉”と“NH への皮肉”の平均評定値に有意な差が生じず、H が NH ほどには十分

Table 4
各条件におけるNH・Hへの皮肉度の平均評定値

	反復条件			
	Hあり・ NHあり	Hあり・ NHなし	Hなし・ NHあり	Hなし・ NHなし
矛盾条件				
Hへの皮肉	4.84(1.87)	5.97(1.75)	2.75(1.78)	2.66(1.96)
NHへの皮肉	6.00(1.68)	3.44(2.02)	6.56(0.98)	3.50(2.27)
無矛盾条件				
Hへの皮肉	1.50(1.11)	2.06(1.66)	2.31(2.05)	1.84(1.19)
NHへの皮肉	1.78(1.41)	2.44(1.97)	1.91(1.59)	2.47(1.93)

注) ()は標準偏差を示す。

にアイロニー標的として同定されなかった可能性が考えられたからである。さて、“ね”という助詞が付加されていない材料を用いた本実験2の結果を見てみると、H反復あり・NH反復なし条件(実験1におけるH反復条件に相当)において、“Hへの皮肉”の平均評定値の方が“NHへの皮肉”の平均評定値よりも有意に高く評定されていることが確認された($t(1, 31)=29.71$, $t(1, 7)=16.27$; いずれも $p<.01$)。この結果は、“ね”という助詞がない場合には、Hが反復的に言及されると、反復されないNHよりもHのほうが“アイロニー標的”としてはるかに同定されやすくなることを示唆している。この差については二通りの可能性が考えられる。その一つは、実験1では“ね”という助詞があったために、Hをアイロニー標的として同定することが抑制されたという可能性であり、他の一つは、“ね”という助詞があったために、NHをアイロニー標的として同定することが促進されたという可能性である。これらの可能性については、実験1の反復なし条件におけるNHへの皮肉評定値と、実験2のH反復なし・NH反復なし条件におけるNHへの皮肉評定値を比較することで検討することができる。この二つのNHへの皮肉評定値をウェルチ検定により比較したところ、実験2における平均評定値(3.50)よりも実験1における平均評定値(4.83)の方が有意に高かった($t(1, 63.84)=5.14$, $p<.01$)。この結果は、実験1において、助詞“ね”があったことによりNHのアイロニー標的としての同定が促進されたことを示唆する。では、なぜ“ね”があるとNHをアイロニー標的と同定することが促進されるのであろうか。その原因は次のように考えられる。助詞“ね”が付加されることにより、話者とHとの間により温和で親密な関係、つまりは仲間内的な関係が想定されるようになり、相対的に、その場にはいないNHがより外的な存在として認識されるようになる。つまり、このことにより、実験1では、実験参加者が、発話を過

剰に高くNHへの皮肉として評価したのではないか、ということである。

次に、本実験にあたり予測された“HよりもNHの方が‘アイロニー標的’として同定されやすい”という予測について述べる。この予測について詳しく調べるため、“Hへの皮肉”および“NHへの皮肉”を“標的者”要因として扱い、“H反復”×“NH反復”×“標的者”の3要因分散分析を行った。その結果、“H反復”の主効果($F(1, 31)=22.83$, $F(1, 7)=24.07$; いずれも $p<.01$)、および、“NH反復”の主効果($F(1, 31)=23.42$, $F(1, 7)=25.98$; いずれも $p<.01$)が認められた。そしてまた、“標的者”の主効果($F(1, 31)=8.50$, $p<.01$; $F(1, 7)=10.83$; $p<.05$)についても認められ、予測されたとおり、“Hへの皮肉”よりも“NHへの皮肉”の方がより高く評価されることが確認された。このことについて、さらに詳しく確認するため、ともに反復がある条件(H反復あり・NH反復あり条件)、および、ともに反復がない条件(H反復なし・NH反復なし条件)について、それぞれに比較した。その結果、H反復あり・NH反復あり条件において“Hへの皮肉”よりも“NHへの皮肉”の方が有意に高く評定されていることが確認され($t(1, 31)=6.25$, $t(1, 7)=6.05$; いずれも $p<.05$)、また、H反復なし・NH反復なし条件においても同様に、“Hへの皮肉”よりも“NHへの皮肉”の方が有意に高く評定されていることが確認された($t(1, 31)=5.18$, $t(1, 7)=5.18$; いずれも $p<.05$)。こうした結果から、アイロニーとして理解される可能性のある発話(ターゲット発話)の聞き手(すなわちH)の発話が反復的に言及されるときよりも、ターゲット発話の聞き手とはならない者(すなわちNH)の発話が反復的に言及されるときの方が、より強くアイロニーとして理解された、ということが確認できたと言える。つまり、“HよりもNHの方が、‘アイロニー標的’として同定されやすい”と

いう予測が妥当であることが確認されたとと言える。

総合的考察

本研究は、アイロニーによる非難の対象がどのようにして同定されるのか、つまり、“アイロニー標的”はどのような手がかりによって同定されるのかを検討した。そしてまた、“アイロニー標的”がアイロニーとして理解されるであろう発話に臨んでいるかいないかによって、“アイロニー標的”として同定される程度が異なるのかどうかについて検討した。

実験 1 では、文脈とは矛盾した状況で、反復的に言及される発話の話者が、アイロニーとして理解される可能性のある発話の聞き手である場合（H 反復条件）、聞き手とはならない者である場合（NH 反復条件）、反復的に言及される発話がない場合（反復なし条件）の 3 条件を比較した。その結果、“H への皮肉”については、H 反復条件が NH 反復条件よりも高く評定され、また、“NH への皮肉”については、NH 反復条件が H 反復条件よりも高く評定された。つまり、H が反復的に言及される場合には“H への皮肉”として理解され、NH が反復的に言及される場合には“NH への皮肉”として理解されたということになる。この結果から、“‘アイロニー標的’は反復的言及によって同定される”と言える。ただし、実験 1 では H よりも NH の方が“アイロニー標的”としてより強く同定されやすい傾向が見られた。

また、実験 1 の結果からは、“ね”という同意を求める助詞による影響のために、H 反復条件における“H への皮肉”の平均評定値と“NH への皮肉”の平均評定値との間に大きな差が生じなかったという可能性が考えられた。あるいはまた、“ね”という助詞が用いられなかったとしても、“H よりも NH の方が、‘アイロニー標的’として同定されやすい”と言える可能性も考えられた。そこで、実験 2 では、ターゲット発話から“ね”という同意を求める助詞を取り除き、また、H と NH の両者について反復的に言及される場合とされない場合とを比較できる設定で実験を行い、以下の結果を得た。

まず、“ね”という助詞を取り除いたことにより、H だけが“アイロニー標的”として同定されるであろう条件（H 反復あり・NH 反復なし条件）で、実験 1 とは異なる結果が示された。実験 1 の H 反復条件では、“H への皮肉”と“NH への皮肉”との平均評定値が同程度であったのに対し、同条件に相当する実験 2 の H 反復あり・NH 反復なし条件では、“H への皮肉”の方が、“NH への皮肉”よりも有意に高く評定された。この結果は、実験 1 の結果が、“ね”という助詞の影響を受けていたことを示す。“ね”という助詞があったために、本来、“アイロニー標的”となるはずの H への非難の度合いが弱まり、対象となる発

話が H へのアイロニーとして評定されなくなっていたのである。

また、H よりも NH の方が、より“アイロニー標的”として同定されやすい、という可能性については次のとおりであった。この可能性について検討するため、実験 2 では、H と NH がともに反復的に言及される場合、あるいは、ともに反復的に言及されない場合に、“H への皮肉”の評定値と“NH への皮肉”の評定値とを比較できるような設定で実験を行った。その結果、いずれの場合であっても、“NH への皮肉”の平均評定値の方が“H への皮肉”の平均評定値よりも有意に高く評価されており、“H よりも NH の方が、より‘アイロニー標的’として同定されやすい”ということが確認された。

この“H よりも NH の方が、より‘アイロニー標的’として同定されやすい”という結果については、アイロニーが有するとされる“face-saving 機能”という社会的機能から説明することができると考えられる。face-saving 機能とは、“アイロニー標的”となる聞き手の面子を脅かさないようにする社会的機能のことである。通常、直接的に非難を表すことは、相手の面子を脅かすことになる。しかし、直接的に非難を表すのではなく、アイロニーを用いれば、相手の面子を脅かすことを避け、相手の面子を保つことができる。この面子を保つ機能が face-saving 機能である。本研究の結果では、アイロニーがこの face-saving 機能を担っているであろうことが示された。本研究の結果というのは、“アイロニー標的”が当該発話の聞き手（H）である場合には、“アイロニー標的”が聞き手ではない第三者（NH）である場合よりも、アイロニーの程度が低く評定されるという結果のことである。本研究におけるこの結果から、face-saving 機能は、あくまでも眼前の“アイロニー標的”の面子をつぶさないために機能するのであり、目の前にいない“アイロニー標的”に対してはさほど機能しないことが確かめられた、と言えそうである。このことから、非難をする際にアイロニーを用いたからといって、必ずしも非難の程度が弱まるわけではないことが示されたと考えられる。以上をまとめると次のとおりである。当該発話が、発話の聞き手を標的としたアイロニーか、第三者を標的としたアイロニーかによって非難の程度は異なる。当該発話の聞き手を標的とする場合には、アイロニーを用いることで非難の程度が弱まるのに対し、そうでない場合には、アイロニーを用いても非難の程度は弱まらない。

以上の結果をまとめると、反復的に言及される発話の元の話者がアイロニー標的として同定される、と言えそうである。また、当該発話のなされる会話の場に参加している対象（一般には人間、より広く言えば、ものやこと）よりも、会話の場に参加していない対象

の方が、よりアイロニー標的として同定されやすい、と言えそうである。

なお、言うまでもないことではあるが、本研究で用いられた日本語の“皮肉”という語の意味と英語の“irony”という語が意味する内容は同じとは言えない。日常的な言語経験からすると、日本語の“皮肉”の使用には、単なる“嫌み”の意味で用いられている場合もあり、アイロニーの本質的特徴である非字義性の認識が希薄になっている使用が多く認められる。そのため、本研究の結果が日本語以外の“irony”全般にも当てはまるかどうかについては、さらなる吟味を待つ必要がある。

引用文献

- Brown, P., & Levinson, C. (1987). *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- Dews, S., Kaplan, J., & Winner, E. (1995). Why not say it directly? The social functions of irony. *Discourse Processes*, **19**, 347-367.
- Dews, S., & Winner, E. (1999). Obligatory processing of literal and nonliteral meanings in verbal irony. *Journal of Pragmatics*, **31**, 1579-1599.
- Grice, H. (1975). Logic and conversation. In C. J. Morgan (Ed.), *Syntax and Semantics*, Vol. 3: *Speech Acts*. New York: Academic Press. pp. 41-58.
- 石田 容士・阿部 純一 (2007). アイロニーによる非難の対象は反復的言及によって同定されるか テクニカルレポート (北海道大学大学院文学研究科心理システム科学講座), **49**, 1-21.
- (Ishida, Y., & Abe, J. (2007). Is the victim of irony identified by echoic mention? Technical Report, (Hokkaido University, Department of Psychology.) **49**, 1-21.)
- Jorgensen, J., Miller, A., & Sperber, D. (1984). Test of the mention theory of irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, **113**, 112-120.
- Katz, N., & Pexman, P. (1997). Interpreting figurative statements: Speaker occupation can change metaphor to irony. *Metaphor and Symbol*, **12**, 19-41.
- Kreuz, R. J., & Glucksberg, S. (1989). How to be sarcastic: The echoic reminder theory of verbal irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, **118**, 374-386.
- Kumon-Nakamura, S., Glucksberg, S., & Brown, M. (1995). How about another piece of pie: The allusional pretense theory of discourse irony. *Journal of Experimental Psychology: General*, **124**, 3-21.
- 岡本 真一郎 (1993). 情報への関与と文末表現——間接形と終助詞“ね”の使用への影響—— 心理学研究, **64**, 395-420.
- (Okamoto, S. (1993). The effects of message relevance to speaker vs. hearer on sentence final expressions. *Japanese Journal of Psychology*, **64**, 255-262.)
- Okamoto, S. (2006). An analysis of the usage of Japanese *hiniku*: Based on the communicative insincerity theory of irony. *Journal of Pragmatics*, **39**, 1143-1169.
- 岡本 真一郎 (2007). 皮肉——何をどのように伝えているのか—— 岡本 真一郎 (編) ことばのコミュニケーション ナカニシヤ出版 pp. 156-176. (Okamoto, S.)
- Searle, R. (1969). *Speech acts: An essay in the philosophy of language*. Cambridge, England: Cambridge University Press.
- (サルル, R. 坂本 百大・土屋 俊 (訳) (1986). 言語行為 頸草書房)
- Sperber, D., & Wilson, D. (1981). Irony and the use-mention distinction. In P. Cole (Ed.), *Radical pragmatics*. New York: Academic Press. pp. 295-318.
- Sperber, D., & Wilson, D. (1986). *Relevance: Communication and cognition*. Oxford, England: Blackwell Publishers.
- 内海 彰 (1997). アイロニーとは何か? ——アイロニーの暗黙的提示理論—— 認知科学, **4**, 99-112.
- (Utsumi, A. (1997). What's irony?: Implicit display theory of verbal irony. *Cognitive Studies*, **4**, 99-112.)
- Utsumi, A. (2000). Verbal irony as implicit display of ironic environment: Distinguishing ironic utterances from non irony. *Journal of Pragmatics*, **32**, 1777-1806.

——2007. 5. 21 受稿, 2009. 7. 11 受理——